

戦間期ハワイにおける日系二世女子教育

——日本語学校から料理講習会まで——

物部ひろみ

Abstract

This article explores the education of Japanese American (Nisei) women in Hawai'i in the interwar period of the 1920s-1930s. Through case studies of Hawaii Women's Middle School, Tachikawa Women's School, and the *Nippu Jiji* Cooking Workshops, the author looks into the common curricula and pedagogical principles that Japanese immigrant educators and parents formulated relative to the question of Nikkei female education. Portions of this article also explain the responses of young Nisei women to the Issei's extolment of orthodox domesticity, middle-class values, and gendered cultural dualism. As Nisei education was deeply entrenched in the larger problem of community survival and reproduction in a so-called second-generation era, it is possible to learn much about Japanese American history of interwar Hawai'i from the examination of how the three institutions aspired to mold Nisei women.

Keywords : interwar, Hawai'i, Japanese American (Nisei), women's education, Japanese language school

はじめに—ハワイ日系社会と女子教育—

1926年11月5日、当時ハワイ最大の日本語新聞『日布時事』に「布哇生れの同胞女子へ」と題された社説が掲載された。『日布時事』は、戦間期（1910年代末から1940年代初頭にかけて）のハワイ日系社会の中道的な意見を代表し、また社主で主筆の相賀安太郎は、穏健派の一世指導者として影響力を持っていた。以下は、「布哇生れの同胞女子へ」からの抜粋である。

従来布哇に生れた日本人女子に対する批評として「日米人の長所美點を取らず、双方の短所缺點のみを模倣して米化したつもりでいる」とか、又は「彼女らは飽くまで女尊男卑の制度を喜び、其の上男子同様の権利や、地位を要求する。然るに彼女らは精神的に何等の準備を有していない」等と言ふ言葉を聴かされるのである。もちろん布哇出生女子を指して全部が皆この批評圏内にあるとは言はない……しかし多くの女子はこの圏内に於かれていはしないかと思はれる點がないでもない。ひっくるめて了へば、彼女達の多数は将来、妻として主婦として、母としての修養や心的準備を等閑視している。而して白人の長所を觀ず、缺點のみに心酔してわがままに振舞っていはしないかと言へるのである。

この日米「双方の短所缺點のみを模倣」し、「女尊男卑」で、「精神的に何等の準備を有していない」という見解は、当時の日系一世がしばしばハワイ生まれの二世女子に対して行った批判と重なるものである。日本人でも、白人のアメリカ人でもない二世女子が、いかに適切なロールモデルを見いだすか、また成人後に女性の立場から日系社会を支えていけるようになるかは、移民世代の深刻な懸念事であった。当時の一般的な概念によると、女子は結婚、出産して家庭を切り盛りすることで、コミュニティ再生産という重要な役目を果たすと考えられており、一世指導者たちは日系社会の存続のために、どのように二世女子を良妻賢母に育成できるかを考えた。また、移民世代の親たちは、いかに成人前の教育が後の人生における就職や、結婚などを左右するかを鑑みて、娘たちの幸福のために学校や家庭における教育を重要視したのは自然な成り行きであった。

このような次世代の育成の問題は、男女を問わず二世一般の問題であり、1920年代半ば頃から思春期・青年期を迎える二世が徐々に増え始めると、それに呼応するかのように第二世代をいかに教育するかの論議がハワイの日系社会で高まった。二世は生得的にアメリカ市民でありながら、日本人の血を持つという特徴を持った最初の世代であり、また日本とは大きく異なる文化的・社会的背景を持つハワイで生活していた。そのため、一世は母国で日本の子供たちが受けていた教育や教育観を単純に当てはめず、ハワイの特殊状況のなかで二世にとって最良の方法を模索したのだった。この二世教育の議論の内容は、親と円滑な意思疎通が取れるように日本語を学ぶべきといった身近で切実な問題から、ハワイ社会のなかで日系人としてどのような人種的・文化的アイデンティティを形成すべきかという民族発展論にまで及んだ。そして一世は、そのような活発な議論に加え、日本語学校をはじめとする教育機関を二世のために設立した。特に女子対象のものとしては、有能な主婦になるための花嫁修業から職業婦人となるための実業教育まで、目的別のさまざまな学校が開校された。また、二世女子対象の教育の場は学校に留まらず、料理やテーブルマナーを教授する講習会が、劇場や集会所などで開催された。

本稿は、戦間期ハワイの日系社会で二世女子対象に行われた教育活動を考察するものである。日本語学校の名門であった布哇高等女学校、行儀作法を教える、いわゆる「花嫁学校」として評判であった立川高等女学館、そして日布時事社によって毎年開催された和洋料理講習会を例に挙げ、二世女子に対する教育がどのような教育方針のもとに実践されたかを分析する。二世の日米二文化教育については、Yuji Ichiokaがアメリカ本土の事例における先駆者的研究を行っている。また、東栄一郎が二文化を修得する手段としての二世の日本留学に注目し、東京の恵泉女学園で学んだ二世女子のケースを扱っている。戦間期ハワイの二世教育についての先行研究では、Eileen H. Tamuraが代表的であり、1920年代から1930年代にかけての日本語学校や公立学校、師範学校（ノーマル・スクール）での二世の経験が詳述されている。また、高木真理子は、オーラルヒストリーの手法を交えながら、戦前のオアフ島の日本語学校の授業内容や生徒の様子を描いている。しかしながら、これまでの先行研究は、二世女子に特化したハワイ日系社会内の教育について言及していない。本論では、二世女子がハワイの日本語学校および日系対象の一般講習会で受けた具体的な教育内容、そしてその背景にあった思想に焦点を当てる¹⁾。

1. 布哇高等女学校のケース

第一次大戦後、大西洋から太平洋へと世界文明の中心が移り、西洋の大国・アメリカと東洋の大国・日本を中心とする文明が開花するという「太平洋文明論」が、戦間期ハワイの日系一世知識人のあいだに浸透した。「太平洋文明論」とは、西洋と東洋の狭間から新しい優れた文明が出現するという概念であり、ここから東西の融合を体現する「太平洋の架け橋」という理想的二世像が生まれた。一世は、日本人の血を持ちながらアメリカに生まれた二世こそが日米双方の立場を理解し、両国の架け橋、つまり円満な二国関係を促進する親善大使になる使命を担うと考えた。さらに1920年代初期に排日運動の気運が高まり、日系人を取り巻く状況が悪化するにつれ、多くの一世がハワイの主流社会と日系社会の仲介者の役割を二世に期待するようになった。これに加え、親子のあいだの意思疎通を円滑にするため、将来日系社会のなかで職を得られるようにするためなどの理由で、一世は二世を日本語学校へ通わせた²⁾。

日本語学校は、1930年代末のピーク時にはハワイに約200校存在したが、そのなかでも群を抜いて人気が高かった浄土真宗系の本願寺付属布哇中学校や布哇高等女学校には、毎年数多くの二世が入学した。布哇中学校は、「在留邦人子弟に充分なる日本語を教授し、徳性訓練の機会を興へて、正當に日本民族の過去現在を諒解さしめ、進んで将来米国民として、日米両国親善の楔子たるべき彼等の思想を啓発し、東西文明渾融の先覚、世界平和の先駆たらしめん」という、まさしく「架け橋」育成を趣旨として1907年、オアフ島ホノルル市フォート街に創立された。1910年には、隣接地に布哇高等女学校（中学校と同様の修了年限4年）が開校、1921年には中学校及び高等女学校の卒業生が日本語の勉強を継続できるように共学の高等科（修了年限2年）が新設された。また、1927年に日本語学校教員養成のための師範科（修了年限1年）が、1938年には教員志望ではないが日本語研鑽を希望する高等科卒業生を対象とした研究科（修了年限1年）が設立された。開校以来、入学者数は激増し、1926年9月には既に入学者を制限するほどになり、校舎や寄宿舎も相次いで増改築された。1939年には中・女学校、高等科、師範科や研究科を総合すると、教職員数28人・生徒数1,347人（男子720人・女子627人）のハワイ最大規模、最高水準の日本語学校となった³⁾。

それでは、「架け橋」となる女性を育成する布哇高等女学校での教育内容は、実際にはどのようなものであったのか。1939年の『卒業記念校友会誌』によると、第一・二学年は週7時間、第三・四学年は週8時間の授業を受けた。科目は、布哇中学校と同じように修身、国語（講読、書き取り、練習）、作文や、習字のほかに英語（訳読）を学び、さらに布哇高等女学校では前述の教科に加え裁縫、家事、作法や話し方の授業（合計週4時間）が必修だった。この週2時間の裁縫の授業は、併設の高等科及び師範科においても女子生徒のみ課せられた⁴⁾。また、布哇高等女学校は各学年に学年主任を置き、生徒の学業や素行を監督した。さらに布哇高等女学校は、オアフ島以外から進学してきた生徒のために本願寺ホームという寄宿舎を備えていたが、寄宿生には炊事や清掃など「家庭自治の訓練をあたふるよう」な教育的配慮がなされた。寄宿舎要覧によると、「女子寄宿舎本願寺ホームの特徴はすべて家庭的に経営され家庭的に女生徒を訓練し性情の円満なる発達を助成するにあり。開教総長夫人を主事とし一切の監督の任に当たらし

め、舎監之を補佐して舎務を鞅掌し室長の如きも之を班長と名付け上級生より舎監之を委嘱し分掌せしむ⁵⁾。」となっている。

このように、布哇高等女学校及び高等科は裁縫や家事、作法の修得に重きを置いたが、それは当時の日系社会のなかで二世女子の大半は学校卒業後、二世男子と結婚し、一家の主婦になるであろうと一般的に期待されていたからである⁶⁾。それゆえ、布哇高等女学校の教育者も、二世女子の使命は良妻賢母になって日系社会を再生産することであり、女子生徒が日本語学校で教養を身につけるのも結婚後に次世代に適切な家庭教育を与えるためだという認識を持っていた。たとえば、1920年代半ばから太平洋戦争開戦まで布哇中学校・布哇高等女学校校長を務めた龍溪玄深は、1930年の『卒業記念校友会誌』の冒頭のエッセイで以下のように述べている。

兎も角女子の智識向上はその社会の文化の高低を卜する尺度となるといってよい。三代目の教育は女子によって直接家庭に於てなされるものである。この意味に於て女子は少なくとも賢母として子女教養によって興國文化の創造を擔當する重大なる責任を有する自覺があつてほしい。将来の清き正しき明るき和けき社会は、女子が男子を超克して成し遂げるべき榮ある偉業であらう。女子の街頭進出も結構であるが、家庭が破壊され子女が放任されて如何なる社会が出来てこようといふのか。女子教育の重大性はここにも認められる⁷⁾。

龍溪は、必ずしも女子の社会進出を否定したわけではないが、二世女子の第一の務めは、将来日系社会の有用な構成分子になる三世を養育して、「清き正しき」エスニック・コミュニティの存続を助けることだと考えた。そして、もしも「家庭が破壊され子女が放任されて」しまったならば、それは妻であり母親である女子の責任であるとしている。つまり、夫であり父である男子は、家庭外の「実社会」で仕事をし、それぞれの分野で功績を挙げることを期待され、一方女子は家庭を守る役割を担うのであり、彼女らがその責任を果たせるか否かは婚前の「女子教育」に拠るところが大きいとした。

また、龍溪は、女子の高等普通教育は男子と同型にする必要がないという立場を取り、学問や技能の専門性を極める教育は、「女性の適性」に合わないと考えた。そのような彼の価値観は、上記の『卒業記念校友会誌』エッセイのなかでも明白に示されている。

最近女子教育熱の盛んなことは驚くべきである。ここ三四年来、本校なども女生徒の数が全体として多くなり卒業生も女子の方が多くなった……また四年までは女子の方が、成績が優っている。これは女子が比較的眞面目に勉強するのと、この年ごとの男女の生理的発達の差違にもよるのであらう。しかし高等科になると男子が伸びるに反して女子はあまり伸びない。応用の才や実力に於ては、女子は上級に至るほど男子の敵でないことが判つて来る⁸⁾。

つまり、彼の見識によると、女子は勉学を極める能力が、しばしば男子よりも劣り、「応用の才や実力に於ては」男子の同格以下の存在であるが、主婦になり、育児をするという「偉業」で初めて「女子が男子を超克」できるのであった。同様に彼の前任者であった浅野孝之は、「同胞

婦人と家庭の問題」（1924）という小論のなかで良妻賢母になることを「女子本来の天職」だと述べ、「私は家庭を暖かい雰囲気中につつま、冷たい秋の人生を花の春にかへす心的活力は、婦人のみが興へられた恩典であると思ひます・・・男は家庭に於てはどうしても女の向こふを張り、又は女の代理をつとめることは出来ません⁹⁾。」と書いている。龍溪や、浅野の持っていたこのような教育論は、現在の我々の視点から見るとややもすれば女性を家庭内に閉じ込めることを奨励する「男尊女卑」的な意見に思える。しかし、これは、1900年（明治32年）に文部省が發布した高等女学校令の「賢母良妻タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ、故ニ優美高尚ノ気風、温良貞淑ノ資性ヲ涵養スルト俱ニ中人以上ノ生活ニ必須ナル學術技芸ヲ知得セシメンコトヲ要ス。」を反映したものだと言えよう。良妻賢母主義は、欧米列強の国々に倣って女子教育に力を入れることにより優秀な国民を育て、国力を増強させようとした明治政府の国策を支えた概念である。それは、「女性に教育は不要である」としたそれまでの一般概念を覆し、20世紀以降の日本の女子教育の主流をつくった。一世であった龍溪らはこの教育思想をハワイに持ち込み、布哇高等女学校の教育方針としたのである。また、良妻賢母主義は、夫の収入だけで家計がまかなえる中流階級以上の家庭の妻は外で働く必要がないという戦間期の日系社会の一般的な価値観に通じるものであった。19世紀末から20世紀初期に写真花嫁としてハワイに渡ってきた多くの一世の女性が日中は砂糖耕地で労働をし、夜間や早朝に家事をするという二重の仕事に従事してきたため、専業主婦というステイタスはむしろ日系人にとって経済的な豊かさの象徴であった。

それでは、このような教育方針を布哇高等女学校の生徒たちは、どのように受けとめたのだろうか。まず、布哇高等女学校の教育を受けた生徒が形成した女性観の一例として、1926年の『卒業記念校友会誌』に掲載された「女として」という題の作文を挙げてみよう。『校友会誌』には優秀作品が掲載されるが、この作文も模範的な内容として選ばれたものの一つであった。

たとひ男女は同権だと申しまして、やはり男は男、女は女でございます。身體の造りから申しまして、男と女はそれぞれ異なった所がございます。人格から申しますれば、昔、日本では男尊女卑と云はれていましたが、それは間違ひで、男女は勿論同等の人格者に相違ございません、が、……俗に『男は度胸、女は愛嬌』と申しまして、男の男らしい點は度量が廣くて勇氣に富んでいる所にあり、女の女らしい點は従順で優美なる所にあります。従順とは禮儀に基づくもので、家にありては父母兄弟の言付に従ひ、學校に出ては教師の訓へを守り、勤め先では雇い主に忠實をつくし、嫁しては良人や舅姑に對して素直である等……私たちは眞實の従順な夫人になるように努め、又男子も及ばぬ強い覚悟を持ってしかも女らしき女として世にたつように努めねばなりません¹⁰⁾。

アメリカで唱われている男女同権を否定してはいないが、まるで江戸時代の武家の妻の心得である『女大学』の「幼にしては親に従い、嫁しては夫に従い」を彷彿とさせるような内容である。この作文が『校友会誌』に模範として挙げられたことから、いかに二世女子が「日本的な」女性、つまり、しとやかで貞淑で忍耐強く、優美で従順な女性になることを布哇高等女学校の教員が奨励していたかが推察される。この武家の妻に類似した理想的女性像は、1941年までの

『校友会誌』掲載の女子生徒の作文のなかに繰り返し登場した。例えば、1929年の『校友会誌』の「女子の修養」には、「女子は女子らしく従順でやさしく、しとやかで」と書かれている¹¹⁾。また、1931年に掲載された「女性」では、「化粧は女性の嗜みである。又、起居動作にも深い注意を怠らない……恰度武士が武道に熱すると同様、佩びる両刀は武芸を磨き、油断をしない。」と、武士が太刀を帯びるように常に化粧をし、また立ち居振る舞いに気をつける女性になるように説かれている¹²⁾。

このように布哇高等女学校では「武士の文化」にもとづく女性観が教えられたが、当時多くの一世代指導者たちが「礼儀」や「忠誠」を強調する「武士の文化」を、「日本の文化」と同一視したことを鑑みると、それは驚くべきことではなかった。「武士の文化」は、明治時代に国定の日本文化として日本の知識人に再構築されたものであり、農民出身であった大部分の一世代が各出身地からハワイにもたらした地方文化とは大きく異なっていた。しかし、一世代指導者たちは、この「武士の文化」を「日本文化」と見なして二世に身につけるように推奨したのだった。例えば、『日布時事』に掲載された論説には、「布哇に居る日本人間の親子の間柄が、いかにも雑駁で礼讓の念に乏しいかを痛感させられるのである。私たちが祖先より伝えられた美しき武士道の精神と伝統的な家庭教育と礼讓の念は、……世界何れの處に出しても恥ずかしからぬものである事を、深く銘々が記憶していて貫きたいものである¹³⁾。」と述べられている。それゆえ、二世女子に対する理想的女性像も、貞淑・優美・従順で、家の跡取りを生むといったような「武士の文化」の価値観に合致するものになったのである。

また、二世女子に高雅な「武家の妻」像に範を取らせたのは、当時彼女たちにつけられた「布哇ボーン」(ハワイ生まれ)の負のイメージを払拭するためでもあった。当時、「布哇ボーン」の二世は、日本やアメリカ本土生まれの日本人の青少年よりも劣っていると一般的に認識され、陽気でおおらかだが、粗雑で無作法、洗練されておらず根気が無い、さらに日本語が不完全で、正しい敬語で話せない等と言われた。また、二世女子はハキハキとはしているが我が儘であるとか、嫁として父母と同居した場合問題がおこるといった評判もたった¹⁴⁾。それゆえ、「布哇ボーン」という語は場合によっては蔑称として使われ、しばしば二世の反発を受けた。『日布時事』紙上に、二世の女性が執筆した「布哇生れの立場から」というエッセイが掲載されたが、そのなかで筆者が「同じ大和民族の血を受けている私達が生まれた土地と境遇が少しばかり相違するために私たちは退化し居るのでせうか……『あれはハワイボーンだ』と深い注意も払わず最後の結論を感受せねばならぬ程私達は日本生まれの人たちより低劣であると自認するわけには行きません¹⁵⁾。」と訴えたほどであった。それゆえ、一世代教育者たちは、ハワイ生まれであることで劣等感を抱かせず、日本人からも尊敬を受けるような女性に育成するため、二世女子に「伝統的な」日本人女性の理想像を模倣させようとした。

さらに二世女子が「日本文化」を比較的容易に受け入れた要因として、当時の国際主義の影響により、東洋と西洋の文化は完全に異なるものではないという認識がハワイに広まったことが挙げられる。戦間期のハワイでは、白人エリートや日系人の知識階層のあいだで国際主義が一種の知的ムーヴメントとして展開されており、国家間・異文化間の相互理解と寛容さを促進し、東西文化の融合を推奨するような風潮が生まれていた。女子教育においても日米の類似点が強調され、婚前の女子の交際を親が厳しく制限するのは白人の良家も同様であり、また学校

卒業後に家庭に入って良妻賢母になることは、アメリカ社会の中流以上の伝統的価値観にも当てはまるとされた。そのような見解は日本語新聞などでも多く見られ、例えば1926年の『日布時事』には「東西の文化なるものをよく調べて見ると、子女對家庭、家庭對教育、教育對社會の問題は、日本も米國も、皆同一である。只異なるは其の風俗習慣から生じた形式の上の問題であって、一般の禮儀作法及び家庭教育の方針などを言ふものは、其の内容に至っていささかも相違した點はないのである¹⁶⁾。」という論説が掲載されている。このようにアメリカ主流文化との共通点を強調することにより、一世教育者は当時アメリカ化運動が盛んなハワイにおいて二世女子に「日本文化」の価値観を抵抗なく享受させようと試みたのであった。

2. 立川高等女学館のケース

二世女子に対する教育方針として、良妻賢母主義は布哇女子高等学校特有のものではなく、ハワイの他の日本語学校でも普遍的に見られた。そして当時一世が経営した学校のなかには、単に日本語や日本文化を教えるだけでなく、ハイティーンの二世女子に花嫁修業をさせることに目的を特化した学校も現れた。その代表的な学校が、立川冴子（1889-1990）が館長（校長）を務めたホノルルの立川高等女学館（以下、立川女学館）であった¹⁷⁾。福岡県出身の立川冴子は、1911年にハワイ島オーカラの在留開教師であった立川真教の写真花嫁としてハワイに渡ってきた。1920年に冴子は夫とホノルルに移り、浄土宗系の布哇女学校（布哇女子高等学校とは異なる）で教鞭を取るようになった。夫の病没後の1931年6月、冴子は17歳から20歳ぐらいまでの二世女子を対象とした立川女学館をホノルル市内キング街に開校した。立川女学館では日本語、日本文化、修身、茶道、生け花、礼儀作法、洋裁、和裁や手芸が教授された。公立学校の課程を終えた年長の生徒は朝8時から夕方5時まで授業を受け、義務教育の課程に学ぶ生徒は公立中学校の授業を終えた午後2時以降にやって来た。やがて、立川女学館に入学させれば、留学させずとも日本と同様の教育を娘に受けさせることができると評判になり、二世の日本留学が盛んになった1932年頃から、ホノルルのみならず地方の父兄から娘を預けたいという申し入れが殺到した¹⁸⁾。ライクロフト街に移転後、本科、家政科、高等科や師範科が相次いで創設され、1930年代末には立川女学館は教員数7名、通学生と寄宿生を合計した生徒数は250名近くに上る規模となった。1940年代初めの授業料は、毎日朝から夕方まで授業を受ける生徒は月5ドル、平日の放課後および土曜日に授業を受ける場合は月2ドルであった¹⁹⁾。これは週12時間授業の布哇高等女学校が同時期に月額3ドルであったことを鑑みると、決して高くはなかった。

それでは、館長立川冴子の二世女子に対する教育観とは、どのようなものであったのだろうか。立川は、「次の時代を背負って第三世、第四世の養育の任に當る人達を心身共に逞しく育てるにはもっと従順に長幼の序を教へることが急務だと思ひます。」と発言しているが、布哇高等女学校の教育者がそうであったように、彼女もまた二世女子の義務は日系社会の再生産に貢献することであり、その目的のために年長者である親や教師は、年少者の二世女子を厳しく管理し、育成する務めがあると考えた。良妻賢母の候補生にするため、立川は二世女子に「秩序正しい生活と高尚な趣味を持たせる事が大切」という信条を持ち、その実践が女学館の寄宿舎生

活であった。約40人の寄宿生が、教員と舎監の監視のもとで厳格な規律に従って生活した。彼女たちは5人ずつ班になって順に料理当番を担当し、平日は4時半に起床して寄宿生全員の食事を作った。当番は前もって献立計画表を立て、館長の立川の許可を得なければならなかった。生徒のなかには、全く料理の仕方を知らないものもいたもので、野菜の洗い方や切り方などを館長自らが指導した。校舎や寄宿舎の清掃も週交替になっており、日曜日に当番が部屋を清掃した²⁰⁾。また、二世女子にふさわしく、結婚後も役立つ趣味として編み物や、縫い取りなどの手芸を立川は奨励した²¹⁾。

さらに、立川は、二世女子の交友関係にも注意を払い、「悪い友達に誘はれ、我儘、気儘が高じ」ることを懸念して、生徒が不品行な人物と関わることをないように腐心した。例えば、新聞に掲載された立川女学館の生徒募集の広告には、「ダンス（社交ダンス）をする人」、「（都会で流行しているように短く）髪を切った人」、「口紅を付ける人」、「爪を染める人」などの不良少女、いわゆる「モダンガール」は入学させないと明言されている²²⁾。また、結婚前の男女交際には懐疑的で、「未だ自分自身で自分の貞操を保護する能力の無い少女を男子に近づけてはならぬ」と考えた彼女は、当時若者のあいだで流行していた「ムーンライトピクニック」という月明かりのなかでのピクニックなどは「結婚前の娘達が行く可きでない」と述べている²³⁾。さらに立川は、「監督者無しで自由気儘に若い人達だけを手放し」にせず、「学校の行き帰りに気をつけ」ることの大切さも強調している。実際、立川女学館の寄宿舎での生徒の単独行動は極力避けられ、彼女たちは昼も夜もグループで行動させられた。公立学校へ行くときのほかは、寄宿生は一人では外出できなかった²⁴⁾。

このように厳格な監督ぶりを発揮した立川だが、同時に生徒をハワイ育ちのアメリカ人だと認め、日本在住の日本人女子と同じ型にはめることを避けた。アメリカ文化についても日本の価値観から外れるからと、やみくもに遠ざけるのではなく、良い側面は、二世に享受させるべきだと考えた。例えば、立川は、映画について以下のように述べている。

厳しくとか厳格にとか良いことに違ひありませんが厳に過ぎると却って不良化させます……中には西洋映畫など絶対見てはならぬ等と申される方がありますが英語を常用語として
いる人たちにそれは餘りに無理解過ぎます……教育的でしかも歴史的なとても良いものが
御座います……子供と一緒に見に行つて分からぬところは、子供に説明して貰ふ様にしま
すと子供も喜びますしそれに親と一緒にですから悪い映畫などには行かうとは申しません。
子供に對しこのくらいの親切があつて良いと思ひます²⁵⁾。

二世は、公立学校に通い、英語で話すことが多く、生活の大部分をアメリカの主流文化の影響を受けて暮らしていた。それゆえ、良妻賢母の候補生として家事や、作法を厳しくしつけながらも、「英語を常用語としてしている人たちにそれは餘りに無理解過ぎます」や、「子供に對しこのくらいの親切があつて良いと思ひます」など発言しているように、立川は「日本の文化」を一方的に押し付けることはなかった。また、日本語のみ話す一世の親と生徒の意思疎通をいかに円滑にするかは、日本語学校の教育者であった彼女にとって非常に重要な問題だった。立川は、二世女子ティーンエイジャーの一般的な傾向として、思春期ゆえ、親と会話することも少なく

なり、「不意に黙りこくくなって（ママ）、唯『エー』とか『ノー』とかの返事をするにとどまる様に」なるのが多いことを懸念した²⁶⁾。そして世代や、文化の違いを乗り越えて一世と二世が距離を縮めることの大切さを挙げ、そのためにも年長者の方から歩み寄って子供とのより良い関係を構築することを推奨した。

それでは、二世の女子生徒は、立川女学館での教育に対して、どのように感じていたのだろうか。1941年1月の『日布時事』に掲載された同校三年生女子の「お作法の時間」と題された作文では、失敗を重ねながらも和気あいあいとした雰囲気の中で敬語や、礼儀作法を身につけていく様子が伝わってくる。

お作法の時間にはいろいろ面白いことがあります。座布団をお客様の前に出す時に「どうぞお上がり下さいませ」と言ふと先生が「どうして座布団が頂かれますか」とおっしゃったので皆がどっと笑ふ。本當にどうして座布団が食べられませう……又此間もお菓子を出して「どうぞごらん下さい」と言って皆を笑はせた生徒もありました²⁷⁾。

また、同作文には、慣れない正座をさせられるなど、最初のうちは作法の授業がかなり難しく感じられたことが書かれている。また、他の新入生も授業中に失敗を重ねるところから、クラスの大半の生徒が、入学するまで礼儀作法を本格的に学ぶことはなかったことが伺える。

私が立川高女に入學してはじめてお作法を習ふ時は胸がドキドキして足が痛くてお行儀よく座られませんでした。先生が教へて下さると私達はおかしい恰好をして實習していました。でも、二年もするとあまり恰好もおかしくななくなり、體がゆう事をきくようになり、勇氣が出て来て、面白味が湧いて来ました²⁸⁾。

授業を重ねるうちに作法が身に付き、自信が出てきたことが綴られており、作文の最後は「私は、はじめお作法の時間がくるとビクビクしていましたが、此頃では楽しみに待つ様になりました²⁹⁾。」という文章で締めくくられている。これは一例にすぎないが、この作文の筆者のように、はじめは親から強制的に日本文化を学ばせられたものの、ある程度基礎が身に付くと日本文化に親しめるのは、むしろ二世ならではの特権だと考えるようになり、修得に熱が入った二世女子が多かったようである。そのような過程を経て、アメリカ人でありながら日本文化にも造詣の深い「太平洋の架け橋」としての自覚が彼女たちのなかで養われていったのではないだろうか。

3. 日布時事和洋料理講習会のケース

二世女子が「日本文化」を学ぶ場は、学校に留まらず、さまざまな講習会にも及んだ。そのなかでも特筆すべきは、毎年千人近い受講者を集めた日布時事社主催の和洋料理講習会であった。1934年から開始されたこの無料講習会は、1930年代を通して毎年6月に3日間の会期で行われ、一流の講師が、デモンストレーションを行いながら各種の和洋料理の作り方を教授した。

受講生の大半は「第二世の主婦と令嬢」であり、少数の男子も混じていたが、彼らは本職の料理人であった。受講者には入り口で抽選券が配られ、協賛の三十数件の商店会社によって豪華賞品が用意された。グランドプライズ（1等賞）の景品は、ホノルル瓦斯（ガス）会社に提供された最新式の料理用ストーブ（調理コンロ）で、その他米1俵、チキン1羽、コーヒー大缶や高級箸などの商品が当選者に寄贈された³⁰⁾。

1934年6月21日から23日にかけて行われた第一回講習会は、ヌアヌ街のリバティー劇場で開催された。『日布時事』が、紙上で繰り返し予告を掲載したせいもあり、午前7時45分から入場開始にもかかわらず、劇場の外には午前6時頃から参加希望者が列を作っていた。講習会は8時半から開会し、正午まで続いた。会場内に入りきれない希望者が外から聴講できるように、窓と扉が開けておかれた。第一回講習会の講師は一世の著名な料理人の磯村高助、二世の家政学の専門家の島村チエノ、そして中華料理の専門家ピーワイ・チョンであった。主任講師であった磯村は、「当地同胞クック界の元老」と呼ばれ、20歳でハワイに渡ってきた一世であった。40年近い料理のキャリアを持ち、ホノルルで長年料理学校を経営していた彼の門下生には、大ホテルやレストラン勤務の一流シェフとなった者も多かった³¹⁾。

二世女子の島村チエノは、パラマ・セトルメントのクッキングスクールの講師で、家政学の専門家であった。彼女の夫は、第二回伏見宮奨学金を受け、ハーバード大学のロースクールを卒業した島村佳徳（Clarence Y. Shimamura）であった。彼は、弁護士として成功しただけではなく、ごく早い時期に裁判官となった日系二世の一人であり、また1930年代末にはエリート二世男子によって組織されていた布哇日本人公民協会（Hawaiian Japanese Civic Association）の会長として活躍した³²⁾。一種の社交クラブであった公民協会は、1930年代から1940年代初期にかけて日系二世の日本国籍離脱運動や、ハワイの立州運動推進を行った政治色の強い団体であった。チエノは、ハーバードのロースクールに入学した夫と共にアメリカ東海岸に約3年滞在し、その間に家政学を研究した。夫の佳徳が日系二世男子を代表する政治的リーダーであれば、家政に熟達している妻のチエノは、理想的主婦をめざす二世女子のロールモデルであった。チエノは料理法を教えることができるだけでなく、日系の良家の子女が知るべき西洋のエチケットやマナーを熟知しており、和洋料理講習会では「西洋料理のテーブルマナー」の講習を行った。正しい座り方に始まり、スープ、パンや骨付きの肉の食べ方を実演した彼女は卓上会話の心得などパーティに招かれたときに注意すべき事柄について講演した。チエノは、完全なバイリンガルであり、「第二世の婦人が多いので英語で講義した」と新聞記事に書かれたようにテーブルマナーの講習は英語で行ったが、料理の実演は日本語を用いることもあった³³⁾。

3日間の料理講習会では磯村と島村、そして中華料理シェフのピーワイ・チョンが、毎日6、7品（日本料理は全体の3分の1）の料理の作り方を壇上から教えた。1品につき15分間かけ、実演を交えて説明した。メニューには、コーンフレーク・ブレッド、チョコレート・プディング、カテージ・パイ、ツナ・サンドウィッチ、フィッシュ・チャウダーやフルーツ・サラダなどのアメリカ料理、また、親子丼、天ぷら、ふるふき大根、卵豆腐などの日本料理が並んだ。どれも比較的安易なレシピであったが、プロの料理人ならではの調理のコツが伝授された。さらには、ハワイという土地柄を意識した「暖国の流儀でハワイ向き」の「シンガポール・カレー」、また「布哇向きサラダ」との注をうった「ココナッツ・グロリー・サラダ」、和洋折衷の

「パインアップル・ヨーカン」などの料理も披露された。また、壇上での料理以外にも、講師たちはサラダや刺身などの料理を数種類作り、受講者の参考になるように毎日会場入り口に陳列した³⁴⁾。

また、料理実演の合間には、さまざまな余興が行われた。講習会一日目には、二世女子によって構成された少女団による日本舞踊の演目が入った³⁵⁾。また、二日目には、ボンタン商会提供の「新流行服展」が行われた。それは「アメリカで流行の先端となっている」スポーツドレスや、アフタヌンドレスなどをまとった5人の若い二世女子のマネキンガール（モデル）が登場するファッションショーであった。靴はニューヨーク靴店の新着商品で、モデルの髪にはチェリー美容院の店主野田夫人によって最新式にパーマがかけられていた³⁶⁾。余興に登場した、和装で優雅に日本舞踊を踊る女性と、アメリカ最先端のドレスをまとって舞台上を堂々と闊歩する女性は、二世女子が内包する日米両文化におけるそれぞれの女性美を象徴しており、ともに二世女子の理想とする女性像であった。

3日間の講習会は、実演された料理だけで20種以上にのぼり、効率良く和洋の料理を修得できたと参加者に好評であった。特に日本料理については、移民世代の女性であればわざわざ講習会で習うまでもない親子丼や天ぷらなど基本的な品が選ばれたが、受講生の大半を占めた二世女子には新鮮にうつったと思われる。講習会前後の『日布時事』には、読者の声が掲載されており、「M夫人（一世）曰く 近く娘が嫁入りますんで修行だと思って出席させて戴くつもりです³⁷⁾」や、「S夫人（一世）曰く 娘が講習会で見て来た料理をやるといふので大騒ぎなんです³⁸⁾」など、二世女子の好意的な反応を伺うことができる。また、「G令嬢（二世）曰く、ミセス島村のテーブル・マナー（ママ）の實習を見て私今まで知らずにやっていたことが恥ずかしくなってよ³⁹⁾」という声も挙げられている。公立学校に通ったとはいえ、二世女子が必ずしも全てのアメリカ文化に精通しているわけではなく、正しい西洋式のマナーを学ぶことは主流社会に受け入れられるためにも有意義であった。このように日布時事社肝いりの和洋講習会は、日系二世女子に和洋の料理が作れ、アメリカ主流社会のマナーに通じた女性になることを推奨する企画であった。つまり、二世女子には、料理や社交などの「女性の領域」においても「架け橋」であることが期待されたのである。さらに、日本とアメリカ主流社会の料理だけでなく、中華料理や東南アジアの料理が作れることは、太平洋に浮かぶ「人種の坩堝」ハワイの共同体の一員である証であり、多民族文化主義を礼賛する行為であった。好評であったため、1934年以降も毎年開催されることになったこの和洋料理講習会は、日米の架け橋であり、ハワイのローカル（地元民）という二世女子のアイデンティティをいっそう強化するものであった。

まとめにかえて

本論は、戦間期ハワイの日系二世女子に対する教育活動と思想を代表的な日本語学校2校と料理講習会の事例から考察するものである。当時、日系社会においてジェンダーによる役割分担が決められており、男子は一家の稼ぎ手になり、女子は主婦になることが期待されていた。布哇高等女学校と立川高等女学館における、家事や礼儀作法に重きをおいた二世の女子教育は、そのような良妻賢母主義の女性観を反映したものであった。「日米の架け橋」になるべく、二世

女子は、日本語学校の教育を通して「武士の妻」という「伝統的な」日本の理想的女性像に近づくよう努力し、日布時事社の和洋料理講習会では、アメリカ主流社会のマナーや日米をはじめとする様々な国の料理法を身につけた。

しかし、このような日系社会における良妻賢母主義にも、次第に変化が見られるようになった。1930年代後半には、専業主婦になって家庭単位で社会の再生産に貢献することだけが人生唯一の目的ではないという意識が二世女子に芽生え始め、二世の職業婦人が増え始めた。前述のように、布哇高等女学校校長の龍溪玄深は、「高等科になると男子に比べて女子はあまり伸びず、応用の才や実力に於ては、女子は上級に至るほど男子の敵でない⁴⁰⁾。」と1930年に述べた。しかしながら、その約10年後には、彼の学校の上級のレベルにおいても女子生徒の方が優れた成績を修めるようになった。成績優秀者のみ入学が許可される高等科第一部は、半数以上を女子が占め、師範科に至っては在籍者の圧倒的大多数が女生徒であった⁴¹⁾。そして師範科の女子卒業生が増えるにつれ、ハワイの日本語学校の女性教員が増加したのも、必然的な結果であった⁴²⁾。また、この時期、裁縫学校や美容学校などの二世女子を対象にした各種職業学校も相次いで設立された。このような傾向は、太平洋戦争勃発後、日系女性の労働市場における完全進出の先駆けともなる現象であった。今後の研究は、日系社会内における二世女子の職業教育と社会進出に焦点を移し、戦中・戦後も視野に入れて調査を展開したい。

注

- 1) ① Eileen H. Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity: The Nisei Generation in Hawaii*, University of Illinois Press, 1994. ② 高木眞理子『日系アメリカ人の日本観—多文化社会ハワイから』, 淡交社, 1992. ③ Yuji Ichioka, “Kengakudan: The Origin of Nisei Study Tours of Japan,” *Before Internment: Essays in Prewar Japanese American History*, Stanford University Press, 2006, pp. 53-74. ④ 東栄一郎「二世の日本留学の光と影—日系アメリカ人の越境教育の理念と矛盾—」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 日本図書センター, 2005, 221-249頁。
- 2) 前掲1) - ④, 223-224頁。
- 3) 布哇中学校・布哇高等女学校『卒業記念校友会誌1939』, 日布時事社, 1939, 78頁。
- 4) 前掲3), 72頁。
- 5) 前掲3), 76頁。
- 6) 当時、ハワイ日系人の通婚は少なく、1926年7月から1927年6月にかけてハワイ在住日系人女子が、810人結婚したが、そのうち日系人以外を伴侶に選んだ者は、41人にしかすぎなかった。『布哇年鑑1928』, 日布時事社, 1928, 19頁。
- 7) 布哇中学校・布哇高等女学校『卒業記念校友会誌1930』, 日布時事社, 1930, 5頁。
- 8) 前掲3), 5頁。
- 9) 浅野孝之『オハイの蔭』, 文生書院, 2007, 88頁。原本は、實業之布哇社より、1925年に出版された。なお、浅野孝之は、1925年に東京に移り、新設の成蹊高等学校の校長となった。
- 10) 布哇中学校・布哇高等女学校『卒業記念校友会誌1926』, 日布時事社, 1926, 20頁。
- 11) 布哇中学校・布哇高等女学校『卒業記念校友会誌1929』, 日布時事社, 1929, 23-24頁。
- 12) 布哇中学校・布哇高等女学校『卒業記念校友会誌1931』, 日布時事社, 1931, 30-31頁。
- 13) 『日布時事』1926年11月5日付。
- 14) 前掲9), 241-247頁。
- 15) 『日布時事』1922年12月2日付。

戦間期ハワイにおける日系二世女子教育（物部）

- 16) 前掲13)。
- 17) 立川冴子の学校は、立川高等女学院とも呼ばれた。なお、彼女が教鞭を取っていたホノルルのマキキ街の浄土宗系の布哇女学校（布哇シユドハ学院）は、フォート街所在の本願寺派布哇高等女学校とは、異なる学校である。
- 18) 中野卓編著『日系女性立川サエの生活史——ハワイの私・日本での私, 1889-1982』, 御茶の水書房, 1983, 372頁。
- 19) 前掲18), 372頁。
- 20) 前掲18), 287頁。
- 21) 立川冴子「家庭に於ける第二世女子教育の再検討」『商業時報』, 1940年10月号, 9頁。
- 22) 前掲18), 286頁。
- 23) 前掲21), 10頁。
- 24) 前掲18), 287頁。
- 25) 前掲21), 9頁。
- 26) 前掲21), 9頁。
- 27) 『日布時事』1941年1月25日付。
- 28) 前掲27)。
- 29) 前掲27)。
- 30) ①『日布時事』1934年6月20日付。②『日布時事』1934年6月21日付。③『日布時事』1934年6月22日付。④『日布時事』1934年6月23日付。
- 31) 『日布時事』1934年6月13日付。
- 32) Clarence Shimamura, "Hawaiian Japanese Civic Association," *Pan-Pacific*, January-March, 1940, pp. 29-31.
- 33) ①『日布時事』1934年6月18日付。②前掲30) - ①。③前掲30) - ②。
- 34) ①前掲30) - ①。②前掲30) - ②。③前掲30) - ③。④前掲30) - ④。
- 35) ①前掲30) - ②。②前掲30) - ③。③前掲30) - ④。
- 36) ①前掲30) - ②。②前掲30) - ④。
- 37) 前掲32) - ①。
- 38) 前掲30) - ④。
- 39) 前掲30) - ④。
- 40) 前掲7), 5頁。
- 41) 1938年度の高等科第一部の卒業生は男子26名・女子41名であった。高等科第一部に入学するには、中学校もしくは女学校の卒業成績が90点以上必要であったため、かなりの難関であった。前掲3), 73・107頁。また、師範科へは高等科卒業生のうち優秀な者だけが入学できたが、女子が大多数を占めた。例えば、1935年の師範科の卒業生は、男子1人・女子11人であり、1938年の卒業生は男子4人、女子22人であった。Honpa Hongwanji Mission of Hawaii, *Directory: A Publication of the 85th Anniversary of the Founding of Honpa Hongwanji in Hawaii*, Honpa Hongwanji Mission of Hawaii, 1974, pp. 178-179.
- 42) 例えば、1940年ハワイにおける日系二世の日本語学校教員数は、男性131名に対して女性は186名であった。ちなみに同年ハワイの日系一世の日本語学校教員数は、男性192名・女性122名であり、日系二世女子は、全教員数631名の約30%を占めた。1930年のハワイの全日本語学校教員数は、男性412名・女性321名であり（一世534名・二世199名）、日系二世女子の躍進がうかがえる。『布哇年鑑1941』, 日布時事社, 1941, 199頁・『布哇年鑑1932-1933』, 日布時事社, 1933, 178頁。